

『長恨哥の抄』絵巻、三卷三軸



『やうきひ物語』挿絵



『長恨哥の抄』

国文学研究資料館には『長恨哥の抄』と題する豪華な絵巻三軸がある。これは「この長恨哥のおこりは唐の玄宗皇帝御位にまします事年久しく、一天四海のまつりごとをただしくし給へるによつて……」と、玄宗皇帝とその寵姫である楊貴妃の物語が語りはじめられるが、しばらくすると「漢皇色を重んじて傾国を思ふ」という白楽天の『長恨歌』の一句が掲げられ、さらに「かんくわうとはかんの武帝とて色このみのおはしましけり……」とその注釈が記され、その後注釈の内容に相応しい挿絵が施される。つまり本絵巻は題名のとおり、白楽天の有名な詩文『長恨歌』百二十句の抄（注釈）を絵巻に仕立てたものであるが、実は万治・寛文頃に出版された絵入り版本の『やうきひ物語』三冊（全十五図）を粉本（手本）として作られたものである。

『やうきひ物語』は仮名草子の作者である浅井了意が版下を書いたとされ、また作者とも考察されており、了意が他の絵巻の製作に関わっていることから、絵巻化も了意によってなされたと考えられる。江戸時代の前期は絵巻や絵本が盛んに製作された時期であるが、文芸の新しい享受者達はそれまでの『竹取物語』『伊勢物語』などの古典作品や、『文正草子』『酒吞童子』など御伽草子だけでは飽きたらず、これまでにない新しい物語を欲した。物語作者でもあった了意は、その要請にこたえるべく『長恨歌』の抄をもとに異国種である楊貴妃の物語を作り上げ、絵入り板本として刊行したのであるが、注文があれば絵巻や絵本にも仕立て売っていたのであろう。同様な絵巻や絵本が国の内外に数本残っている。謂わば、『長恨哥の抄』絵巻は新しい時代の求めによって作られた文芸作品と言えるのである。

図版に掲げた場面は、中巻の第二図で、安祿山の乱により都を追われた玄宗が、一緒に連れて逃げてきた楊貴妃を高力士によって引き離され、悲しむところである。詞書には、「貴妃は玄宗の御衣の下に顔を差し入れて泣き給ふ。帝絶へかね給ひ、朕をまづ殺して後に貴妃をもうしなへかしと歎き仰せらるれども、高力士御車の上に参りて、貴妃のかいなを引きたて行く。玄宗は心消えてもだえむつがり給ふ」とある。粉本とした『やうきひ物語』の同じ場面を参考までに掲げた。両者を比べると、絵巻の絵師が版本の挿絵を参考に描いていることがよくわかる。

（小林健二）